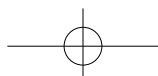
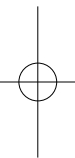


2019

国語

注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。



一
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二学期が始まってすぐ、同じクラスのジュン（奥村淳也）が突然亡くなった。「ぼくたち」はジュンの死に対して泣けないことに後ろめたさを感じていたと同時に、当初は大泣きをしていたクラスメイトや、ふさぎこんでいた担任の坂崎先生がすぐに何事もなかったかのようにふるまっていることに違和感を抱いていた。

だって、人が死んだんだぞ。笑っていられるか。机は今日も三十六個。でも、ほんとうは三十七あったんだ。ジュンは消えた。こういうことってあるんだ。

そして、こういうことがあるのなら、どうしてそれがジュンだったのだろう。祐のお父さんが言った、「いい子だったから、神様が早くお召しになったのだ」という言葉が、^①ぼくたちの間に波紋を広げていた。

「キリスト教では、死ぬことは永遠の命をもらうってことなんだ。だから悪いことじゃないんだけど……」
祐があやふやな口調で言ったのを、

「全然わかんねえよ」

智昭が途中でさえぎった。

ぼくもまったくわからない。いい子だから早く死ぬようにするのだとしたら、祐には悪いけど、神様は相当に残酷だ。

でも、クリスチャンではないのだが、お母さんもこの間、ぼつりと言っていた。父母会があり、いろいろ聞いてきたらしい。

「淳也君って、すごくいい子だったんだって。そんないい子だから、早く亡くなったのね……」

どうして、いい子だったら早く死ぬんだ？ いい子にしろ、いい子にしていたら、小遣いをあげてやる、新しいグローブを買ってやると言われたことがあったけれど、いい子にしていたら早く死んで、小遣いもほしいものも何ももらえないってことじゃないか。

悪い子だったからばちがあたつたと考える方が、ずっと自然だとぼくは思う。あの日、坂崎先生が取り乱して言った、「悪いことしてないのに、どうして」というのは当然の疑問だ。

ある日の帰り道、ぼくたちはまたジュンのことを話していて、

「もしかして、ジュンって実は悪い子だったんじゃないかな」

と、ぼくは言った。言ってから何だかあわてて口を覆ったが、
「かもな」

と智昭ちしやうが言った。同じことを考えていたのかもしれない。

「そうじゃなかったら、ジュンが死ぬわけがないってことだな」
祐ゆうが腕組みうでかまをして言った。

「宿題。②ジュンの悪いところを思い出してくること！」

智昭ちしやうが 勇あんで言った。

悪いところも何も、ジュンのことを思い出すのは大変だった。なにしろ、ほんとうにめだたない奴やつだったから。

ジュンと初めて会ったのは、いつだったのだろう。ジュンは、隣の小学校となりに通っていた子だ。ぼくが四年生のとき、学校が合併がつぺいしたから、四年生のときかな。顔くらいは知っていたと思うけれど、同じクラスになるまで話したことはなかったと思うし、同じクラスになっても話したことがあったかどうか。でも、ぼくだけではないと思う。ジュンは特に誰だれかと親しいというわけではなく、いつも一人でいたのだ。

もっと積極的に、友達を作らなきゃだめだ。マイナス1。でもだからといって、クラスからはずれているというわけではなかったと思う。クラスの男子でドッジボールをしようというとき、ジュンは参加していたし、一人で勝手なことをしていたわけでも、嫌きらわれていたわけでもなかったんだ。プラスマイナスゼロ。そういえば、終わってみんな帰ろうとしているときに、ボールを片づけていたことがあったな。へえ、あいつ偉えらいなど思ったことがあった。プラス1。いや、もっとかな。

お母さんが聞いてきたことだけれど、やさしい子だったんだって。寝たきりのおじいさんの、介護かいごをよく手伝っていたんだって。

そんなこと、少しも知らなかった。いや知っていたかな。前によく書いているというところで、作文を読まされていた。お年寄りが明るい気持ちで長生きができるように助けたい。お年寄りにやさしい社会を作っていきたい、とか何とか。でも、ふうん、あいつはそういうことをしたいのかと、それは野球の選手になりたいとか（ぼく）、パン屋さんになりたいとか（智昭）、アイドル歌手になりたいとか（ミーコ）、あるいは神のみこころのまま（祐）と言っているのと、③そう違いはないように受け取っていた。

だけど自分が介護をするだけではなく社会も変えるには、そうとう頭がよくなくちゃいけないんだろう？ ジュンは勉強していたのかも
しれないけれど、特に勉強ができるわけではなかったと思う。ジュンはたぶんぼくたちと同じくらいかちよつとできるくらいだ。そんな

じゃ、だめだ。マイナス1。おとなしくて、自分から手を挙げるなんてこと、なかったし、智昭みたいにおもしろいことを言ってクラスをわかせる、なんてことは、もつとなかった。さらにマイナス1。

でも、こうしてあらためて考えてみると、勉強ができるからってえらいわけじゃない。受けをねらって、おもしろいことを言わなければいけないわけではない。何か言って、みんなが笑ったらいいな、人気者になりたいなんて思うけれど、あいつはそういうことを考えない奴だったんじゃないだろうか。ただ自分の目標に向かって、一生懸命けんめいやっていた。それって、実はすごくかっこうよくないか。

ぼくはだんだんあいつがいい奴でならなかったような気がしてきてあせり、必死で悪いところを探そうとしていた。

(中略)

終業式の日、ぼくたちはまた石を蹴りながら帰った。ぼくたちは、たいてい④何かおもしろくないことがあって(人生って、こういうものなのかな)、よくこうして石を蹴りながら帰るのだ。

ぼくは成績が下がったことを、お母さんになんと言わけい訳をしたらいいかわからずに石にあたり、それから、やはりこの間の先生の言葉が引つかかっていた。

「なんでジュンのせいなんだよ」

ぼくは言った。

「成績が下がったのは、ぼくが勉強しなかったせいなんだ。ジュンとは関係がない」と、

⑤大人って、ほんとになんでも理由をつけるよな」

1 と、智昭が言った。

「この前、ぼく、道で転んだのね。そうしたらお母さんが、きのう妹を泣かせたから転んだりするんだって。いったいどういう関係があるんだ」

「ぼかばかしい。」

2 転んだのに、くだらない理由をつけて」

祐がさめた口調で言った。

「大人ってなんでも理由をつける、か」

ぼくは智昭の言葉を繰り返した。

(中略)

「ほんとうに 3 理由をつけたがるよね」

つまり、ぼくの成績が下がったことに、先生も理由がほしかった、ということなのだろう。

「大人って、理由がないと困るんだろうな。何でも理由をつけないと受け入れられないんだ。弱い奴らなんだよ」

祐がまた大人びた口調で言い、言ってから、^bはたと立ち止まった。それは智昭とぼくも同時だった。

三人、ゆつくりと顔を見合わせると、^⑥それぞれの顔に、じんわりと笑みが広がるのがわかった。それからぼくたちは、声を出して笑った。今まで心のどこかにあったもやがいつきに消えて、どうしたんだろう、ずっと遠くまで見渡せる気分だった。ものごとがわかるというのは、なんとすっきりと気分のいいことなのだろうか。

「ジュンは、ただ死んだんだよ」

智昭が言った。

「理由なんてないんだ。あいつは、理由もないのに死んじゃったんだ」

いい子だったからでも、悪い子だったからでもない。ただ、死んでしまったのだ。

ぼくたちは、ようやく解けた謎に興奮して、体操着の入った袋をぐるぐるとまわしながら夕焼けの町を歩いていった。むろん、石なんて蹴らない。腕を振り、元氣よく歩いていった。

でも、しだいに腕が重たくなってきた。勢いをつけないと振れなくなり、
と下げて立ち止まった。 4 勢いさえもつかなくなって、体操着の袋をだらん

「かわいそうだな。理由がある方がまだよかったよな」

祐が言った。三人、同じ思いでいた。

「くそう、^⑦初めて涙が出るぜ」

智昭が言った。祐もぼくも、泣いていた。

(有吉玉青『ぼくたちはきつとすごい大人になる』による)

(注) この間の先生の言葉が引かかっていた……坂崎先生に呼び出され、期末試験の点数が悪かったのは奥村君のことを考えていて、勉強に集中できなかつたせいではないかと言われていた。

問一 波線部 a・b の言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

a 勇んで				b はたと			
ア	張り切った様子で	イ	強がった調子で	ア	ゆつくりと	イ	不安げに
ウ	あせった様子で	エ	あらたまった調子で	ウ	鋭く <small>すど</small>	エ	急に
オ	楽しそうな様子で	オ	楽しそうな様子で	オ	忙しく <small>いそが</small>		

問二 傍線部①「ぼくたちの間に波紋を広げていた」とありますが、どういふことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 「いい子」だから早く死んだという祐の父親の説明が「ぼくたち」の間に説得力のある言葉として受け止められたということ。
イ 「いい子」だから早く死んだという言葉が日頃大人たちが求める「いい子」とかみ合わず「ぼくたち」を動揺どうようさせたということ。
ウ 「いい子」だから早く死ぬというキリスト教の教えが「ぼくたち」には理解しがたく投げやりな気持ちにさせたということ。
エ 「いい子」だから早く死ぬという言い方が真面目まじめに死を考えていないと感じられ「ぼくたち」の反感を買ったということ。
オ 「いい子」だから早く死んだという言葉によって「ぼくたち」が抱いてきた違和感や不安を解消する働きをしたということ。

問三 傍線部②「ジュンの悪いところを思い出してくるごと！」とありますが、なぜ「ぼくたち」はこのようなことを考えたのですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア ジュンに悪いところがないと、泣けない自分たちを正当化できないから。
イ ジュンの悪いところを見つけないことが、ジュンにとってよいことだと思っただから。
ウ ジュンに悪いところがあったと言えれば、神様の残酷さを否定することができるから。
エ ジュンの悪いところを見つけれれば、坂崎先生の悲しみもやわらげることができるから。
オ ジュンに悪いところがあったならば、そのためにばちがあつたのだと考えることができるから。

問四 傍線部③「そう違いはないように受け取っていた」とありますが、ここで「ぼく」はどのようなことに気づきましたか。その説明としてみても適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 「野球選手」や「アイドル歌手」になりたいと考えていた「ぼく」と、お年寄りが明るい気持ちで長生きできるように助けたいと思っていたジュンに違いはなく、将来を楽しみにしていたということ。

イ 自分勝手に将来を考えて社会の問題点などに興味を持たなかった「ぼく」と、常に社会問題と真剣しんけんに向き合い、その改善に力を尽くしていたジュンはまったく違う世界に住んでいたということ。

ウ 誰かのためなどということを考えず、軽い気持ちで将来のことを考えていた「ぼく」と違い、お年寄りのための社会作りをまじめに考え、将来の夢を抱いていたジュンは立派でかつこうよかったということ。

エ 将来に対してそれぞれ夢やあこがれをもっていった「ぼく」と、社会を変えようという壮大な夢そうだいをもっていたジュンはどちらも勉強がさほどできなかったという点では同じだということ。

オ 「パン屋」や「神のみこころのまま」と実現不可能な夢を抱いていた「ぼく」と、お年寄りにやさしい社会を作りたいという現実的な夢を抱いていたジュンはまったく違うということ。

問五 傍線部④「何かおもしろくないことがあって」とありますが、この時の「ぼく」にとって「おもしろくないこと」とは何ですか。次の中から当てはまらないものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ジュンが死ななければならなかった理由がわからないこと。

イ 学校の成績が下がったことを先生に指摘しってきされたこと。

ウ 人が死んだというのに皆みなが笑っていられること。

エ ジュンが自分の目標に向かってがんばっていたこと。

オ 大人がいい子を理由にジュンの死を納得しようとしていること。

問六 傍線部⑤「大人って」とありますが、ここで「ぼく」たちは「大人」がどのような人間だと気づきましたか。二十五字以内で答えなさい。

- 問七 空欄1～4に入る語としてもっとも適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。
- ア ますます イ とうとう ウ はるばる エ たまたま オ しみじみ カ いちいち

問八 傍線部⑥「それぞれの顔に、じんわりと笑みが広がるのがわかった」とありますが、「ぼくたち」がどういう気持ちからどういう気持ちに変わったことがわかりますか。七十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問九 傍線部⑦「初めて涙が出るぜ」とありますが、「初めて涙が出」たのは何に気づいて、どういう気持ちになったからですか。四十字以内で答えなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

独学する心は、学問や読書にだけあるのではもちろんない。およそ人が生きるために学ぶ行為の中では、いつも必要とされているものではないだろうか。例えば、私が去年知り合った大工さんは独学の権化のような人だ。自分の家を改築したときに、この人に来てもらった。歳は当時六五歳だった。名前は高橋茂さん、大工としての腕もとびきりだが、生きる姿もすばらしい。

高橋さんが子どもだった頃は集団就職の全盛期。この人は中学卒業後に埼玉へ出て、大工の親方に弟子入りをした。そこで一番つらかったのは、「自分が何をすればいいか、だれも言ってくれなかったこと」だったそう。作業現場に行っても、指示がこない。親方の仕事を後ろから見てみると「仕事の邪魔だ」とか「ぼーっとしているな」などと怒鳴られる。棒で殴られたこともあったそう。働きに出て、何をしたらいいかわからないほどつらいことはない。中学を出て親元から離れたばかりの子どもだから、さぞつらかっただろう。

でも、現場にしばらく通っていくうちに、自分が何をすればいいのが段々とわかってきた。そうすると、親方と自分の差というものがおのずと見えてくる。親方の鉋から出る削り屑を見て、びっくりする。「どうやったらこんな具合に削れるんだろうか」と考える。夜、皆の仕事が終わり、後片付けもすませてから、一人で鉋を手にとって不用な木材を削ってみる。① 見よう見まねだ。そうするうちに仕事だんだんとおもしろくなってきたという。奉公に入ってから一年くらいでそうになった。大した進歩、大した教育じゃないか。

大工の奉公働きには、給料なんかない。もらえるのは、何百円かのこづかいだけ。まだ見習いだから、とにかく仕事以外にすることがない。気がついたら、えらく腕を上げていた。働きはじめて五年目に、親方がいきなり「お前はもう一人前だから給料を出す」と言った。一人前の職人に払う給料をいきなりくれたそうさ。年功序列なんかじゃない。これもまた、^②ため息の出るほどすばらしいシステムである。

ここで君たちに考えてもらいたいのは、なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか？ ということである。もちろん、意地悪をしているのでも、技術を隠しているわけでもない。^③口で教えることで死んでしまう技が大工の技だからだ。言葉で教えられたものは、すぐに忘れてしまう。それはただの知識だから。自分の体を使って発見したものは忘れない。そういうものは知識じゃなく、身についた自分の技になっている。

人間の体は、手も足も一人ひとり違う。大工が木を削るにしても、そのときの感覚、高橋さんの言葉では「勘」は、人によって異なる。木と体と鉋、この三つの間にできる関係は、一〇〇人いたら一〇〇とおりある。これを口先で教える方法は絶対にならない。これは職人ならだれでも知っていることだろう。だから各々が独自に身につける必要がある。自分なりにあれこれと取り組んでみて、わかる以外にはない。それから大工というものは、自分の扱う木がどう育ってきて、これからどういうふうに変化するか、どう反って、どう縮むか、木を持っただけでじかに感じられるようになる。でないと、生きたいくつもの木をどう組み合わせたらいいかはわからない。

ところが、電気鉋しか使わない現代の大工さんは、もうそうした感覚を失っている。感覚なしでも、機械が全部やってくれるから。それから無垢の木を扱うことがほとんどなくなった。工業製品の合板は、死んでいて、変化しない。部品として組み立てるだけがいい。これじゃ、^④木を読むなんて技が育つわけがない。^⑤鉋をかける技もなく、木を読むことのできない大工は、高橋さんのような職人からするともう大工とは言えない。建設会社の社員である。

もちろん、これは大工の世界に限らない。近代以降、^⑥人間が自然を相手に身につけてきた大切な技はどんどん失われてきた。私たちは、機械の便利さに慣れきって、身ひとつの「勘」でしか磨かれぬ技を持ってなくなってきた。独学する心は、^⑦ここでも失われてしまった。
(中略)

西洋の近代とは、^⑦自然を科学の力でねじ伏せようとしてきた時代ではないか。むしろ、そんなことはできないのだが、できる気になっ

てしまっている。科学は、あらゆるものを数の関係に置き換えて、(物を有用に働きかける)ことを目的にしている。つまり、自分の都合に合わせて、自然を利用するわけだ。だから、物にも自然にも、おのずと愛情や敬意を持たなくなる。口では持っているようなことも言うが、物とつき合う

体も技も欠いているのだから、愛情は育ちようがない。

建築もそうで、工業生産品を組み立ててつくる建物は、全部数学的な関係をあてはめて考えられたものだ。それを考える人を建築士というのだが、建築士は図面を引くだけで、木にも石にもじかに触れるということがない。触れたって、そこから何かを掴む技を持っていない。何でも数のうへの計算で済ませる。この計算がどんなに高いビルをどれほど建てたかほだれでも知っている。でも、そういうやり方に、人間が自然の中で、言い換えると天のもとで生きる知恵というものがあるだろうか。これがないと人類は大変なことになってしまう。

これは、高橋さんに聞いた話だが、^⑧大工と建築士の間では、柱一本立てるのにもたびたび意見が食い違う。知識と計算で物事を考える人と、身ひとつの勘と技で仕事をする人とはそうなるだろう。それから、高橋さんはこんなことも言う。「仕事にはできることとできぬこととがある。素人はそこんところがわからねえから困るんだ」と。できないことがあるのは、自然が与える物の性質に従っているからである。もし、できないことがなくなったら、仕事は成り立たなくなる。水のないプールでは泳げないようなものだ。建築士はそうは考えない。できないことは、そのうち科学技術の進歩で可能になる、できないことを放っておくのは恥だと思っている。私たち素人もだいたいそういう考えでいる。これじゃ、^⑨人間に大事なことが、何もわからなくなるのではないか。

(前田英樹『独学する心』による)

(注1) 独学の権化：「独学」が人間の姿をしているということ。

(注2) 集団就職：高度成長期、中学を卒業した少年が、出身学校や地域ごとにまとまって上京し、大都会の工場や商店に就職したこと。

(注3) 年功序列：年齢や勤続年数によって、地位の上下や給料が決められる制度。

(注4) 無垢の木：接着剤で合成していない、木そのままの状態で製材したもの。

問一 傍線部①「見よう見まね」の意味で、ここでの意味にもっとも近いものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア わが道に行く
- イ 当てずっぽう
- ウ 習うより慣れろ
- エ 七転び八起き
- オ 乗りかかった舟

問二 傍線部②「ため息の出るほどすばらしいシステム」とありますが、それはどういうところがすばらしいのですか。四十字以内で答えなさい。

問三 傍線部③「口で教えることで死んでしまう」のはどうしてですか。次の中からもっとも適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア たくさんの内容を口で教えても、一度に理解しきれないので十分な理解にはならないから。
- イ 口で教えて頭で理解させたとしても、実際に体を使わないと身につかず役に立たないから。
- ウ 口で教えられると誰にもよく理解できるが、個性が十分に発揮できなくなってしまいうから。
- エ 口で教えると教える人によって言い方が違うので、正しいやり方がうまく伝わらないから。
- オ やり方を伝えようと口で教えれば教えるほど、誤った方向に誘導してしまいかねないから。

問四 傍線部④「木を読む」とはどうすることですか。それを説明している一文の初めの五字を抜き出しなさい。

問五 傍線部⑤「鉋をかける員である」とありますが、「建設会社の社員」とは具体的にどのような人ですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑥「人間が自然を相手に身につけてきた大切な技」に当てはまらないものを二つ、次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 春になって田植えをする時期を、山の雪や花の咲き具合で判断する。
- イ 冷暖房器具を取り入れて、一年中快適な温度で生活できるようにする。
- ウ 川の濁り具合や小石の流れ方で、洪水を予知して災害から身を守る。
- エ 森を切りひらいて広い農地を作り、植物を栽培して豊かな収穫を得る。
- オ 干物や漬け物を作っておいて、魚や野菜が取れない季節に備える。

問七 傍線部⑦「自然を科学の力でねじ伏せよう」というのはどうすることですか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 傍線部⑧「大工と建築士の間では、柱一本立てるのにもたびたび意見が食い違う」とありますが、「大工」と「建築士」の考え方を、その違いがわかるようにそれぞれ答えなさい。

問九 傍線部⑨「人間に大事なこと」とは何ですか。次の中から、本文の内容に当てはまるものを二つ、次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 知識と計算を駆使して、人間に不可能なことを減らすこと。
- イ 自然に愛情を持ち、自然破壊を食い止める技術を持つこと。
- ウ 人間は万能だと思わず、自然の与える物の性質に従うこと。
- エ 勘に頼らず、親方に教えられた通りに技術を習得すること。
- オ 科学の力で自然を解明し、人間に役に立つものにする。
- カ 人間の限界を知ること、人間が生きる知恵をつけること。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 着物を借りるキンガクを確かめる。
- ② ボウカンのためにセーターを買う。
- ③ 外国人にもモンコを開く。
- ④ 回復するためには十分なセイヨウが必要だ。
- ⑤ 必要のない部分をハブく。

[問題はここまです。]

